

平成 17 年 2 月の解説（週間天気予報）

【2 月の天候状況】

2 月は、日本付近を低気圧が短い周期で通過したため、ほぼ全国的に晴れの日が少なく、日照時間も少なくなりました。月降水量は、北・東日本の太平洋側を除いた広い範囲で、平年より多くなりました。また、気温変動の大きい特徴が 1 月から続いており、低気圧の通過した後に流入した強い寒気の影響で、日本海側の地方を中心に大雪となりました。

8 日、13 日、18 日から 19 日にかけてと 25 日に、本州の南海上を通過した低気圧や強い寒気を伴った上空の気圧の谷の影響で、太平洋側の地方でも雪が降りました。

また、23 日には発達しながら日本海を通過した低気圧の影響で、関東地方などで春一番が吹きました。

【2 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は、全国平均で例年（注）より 2 ポイント低い 69% でした。北日本と北陸地方では例年より 5～6 ポイント高くなりましたが、西日本を中心に例年より低かった地方が多く、前線や気圧の谷の通り道となって曇雨天の日が多かった沖縄地方では例年より 23 ポイント低くなりました。

最高気温の予報誤差は、全国平均（2～7 日目の平均）で例年より 0.3℃小さい 2.2℃でした。全国的に例年より小さい地方が多く、北海道と北陸地方は例年より 0.7℃小さくなりました。

最低気温の予報誤差は、全国平均で例年より 0.2℃小さい 2.0℃でした。ほぼ全国的に例年より小さく、北陸・九州北部・九州南部の各地方は例年より 0.4～0.5℃小さくなりました。

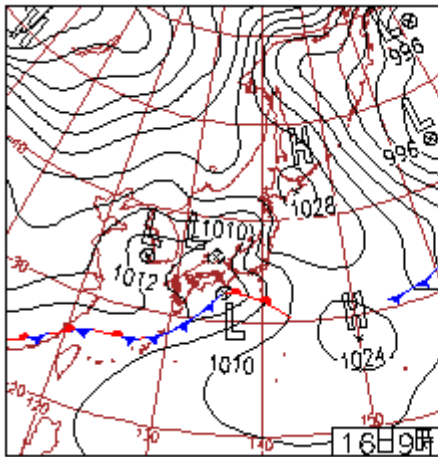
（注）例年値は気象庁 H P（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【2 月の週間天気予報から】——低気圧通過後の南岸前線（17 日の東京地方の予報から）——

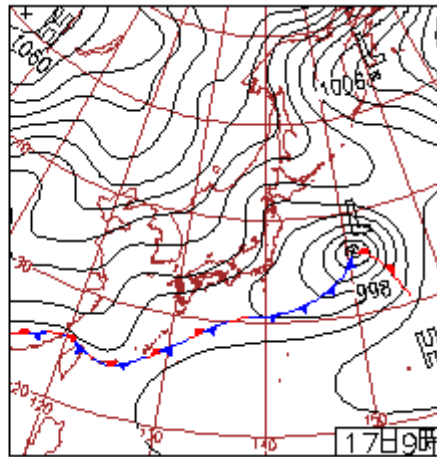
10 日に発表した東京地方の週間天気予報では、「16 日夜から 17 日朝にかけて本州付近を深い気圧の谷が通過して全国的に天気が崩れる」と判断し、16 日と 17 日の両日を「降水あり」としました。14 日までの予報では、気圧の谷に伴う低気圧が本州上を通過するタイミングが半日程度早まり、「16 日夜に本州上を発達しながら通過して東京地方の天気を崩し、低気圧が通過後の翌 17 日は本州南岸の前線の影響で雨が降る」予想に修正していますが、結果的に、10 日以降 14 日まで発表した週間天気予報では、16 日・17 日の両日とも東京地方は「降水あり」となりました。

実況では、16 日の日中に日本海沿岸付近と本州南岸付近を複数の低気圧が相次いで通過して、東京地方でも雨が降りました。これらの低気圧が、17 日に本州の東海上で 1 つの低気圧となって発達した影響で、北の高気圧の張り出しが予想以上に強まり、本州の南海上にあった前線を南下させました。

その結果、17 日は南海上の前線の影響を受けなかったため、東京地方には雨が降りませんでした。



16日9時の地上実況天気図



17日9時の地上実況天気図

【4月の天候の特徴と週間天気予報の利用に際して】

4月は、低気圧や前線が周期的に通過するようになります。低気圧の通過した後に移動性高気圧に広く覆われる日は晴れて風の弱い穏やかな天気となりますが、夜間にこのような状況になると、放射冷却により地表付近の気温が下がるため、霜の降りることがあります。最近では平成16年4月25日に、栃木県・群馬県・岐阜県・静岡県・高知県で大規模な凍霜害が発生して、お茶や果樹などの農作物に大きな被害がありました。

気象庁ホームページの週間天気予報では、このような「晩霜（おそじも）」の発生に伴って農作物の被害が予想されるときは、概況の中で注意を促しています。